



(公財) 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター

20周年記念誌・国内

→デジタル版公開ページ <http://www.rirc.or.jp/20th/20th.html>

*印刷してご利用の際は 2 頁目以降を印刷して下さい。

首都圏在住のネパール人の信仰と 宗教習俗の維持

—大久保地域における調査を中心に—

林崎冴美

はじめに

2000 年代後半から、在日ネパール人の数が急増している。彼らはネパールにおいて生活の中で実践していた宗教の儀礼や習俗を日本においても実践しようと努める。本稿ではネパールの人びとの宗教実践が、日本という異国の環境下でどのように展開しているかについて、筆者がこれまで調査してきた東京都の大久保地域の事例を取り上げつつ論じる¹⁾。ここはネパールの人びとが数多く集まる一地域であり、今や「リトルカトマンズ」とも呼ばれている。

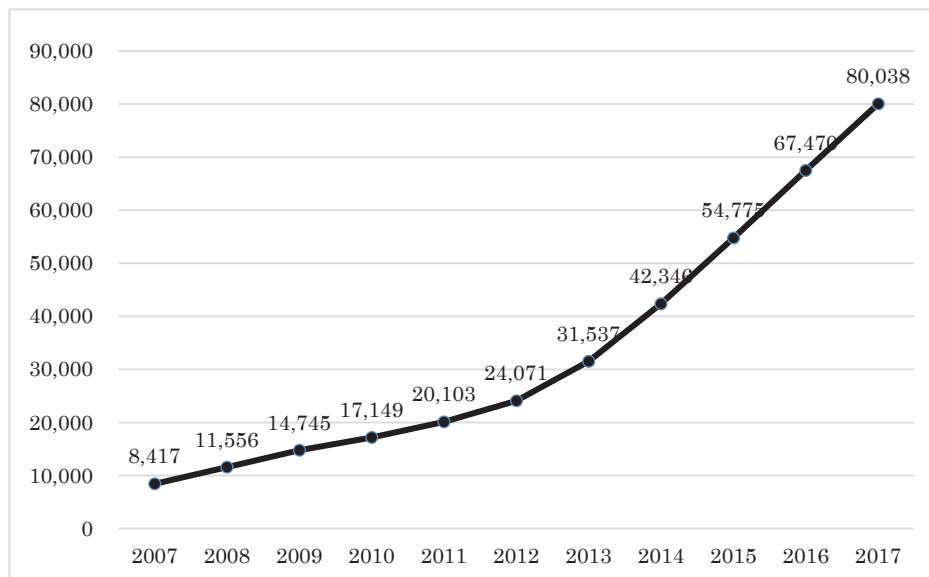
本稿では主に筆者がこの地域において行ったインタビューによって得られた情報をもとに、グローバル化が彼らの信仰に対しどのような影響を及ぼしているのかを概観する。たんにネパールと日本の宗教あるいは宗教文化の違いという問題だけではなく、21 世紀における世界的な変動の影響が、この地域においても見てとれることを確認してみたい。

1. 在日ネパール人の増加とその背景

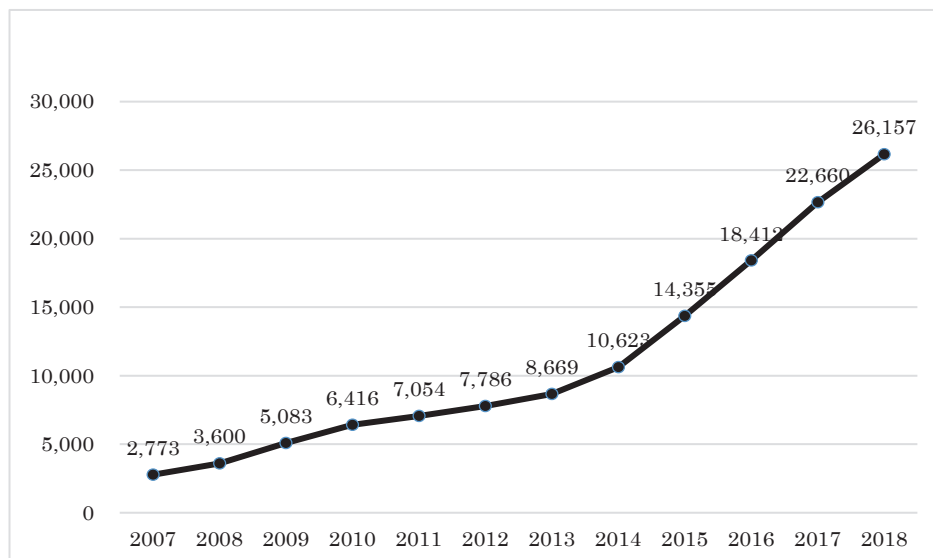
法務省の「国籍・地域別在留外国人の推移」によると、在日ネパール人の数は 2017 年末で 80,938 人である。男女ともに 20 代から 30 代の人びとが大多数を占める。特に 2012 年前後からは年間約 1 万人が増加しており、他の国々から来た人びとのコミュニティと比較してもその伸びは著しい（グラフ 1 参照）。

東京都に焦点を合わせてみると、こちらも日本全体とほぼ変わらないペースで推移している。特に 2014 年以降の増加は目覚ましい。その数は年間 4 千人にのぼり、小さな町が年にひとつ生まれていると言っても差し支えないほどである。それだけの新しいネパール人が、年々東京を訪れ、在留している（グラフ 2 参照）。

グラフ 1 日本在留ネパール人の推移



グラフ 2 東京都における在留ネパール人の推移



なぜ在日ネパール人はこれほど急激に増加したのだろうか。経済的な要因としてまず挙げられるのは、1996年から10年にわたり続いた、ネパールで起こった内戦によるネパール国内経済の低迷である。国内に十分な雇用機会が生まれず、ネパールの人びとは海外移住の第一段階として留学という道を選択する傾向が強くなっている。ネパール国内に居住するネパール人も、在外ネパール人からの送金をあてにしている。同国の国外労働法が2007年に大きく改正されたことも大きい。1985年にネパールで施行された国外労働法は、在外ネパール人を雇用する際の届出方法の規定や、在外ネパール人が不当な労働環境に置かれた際のネパール政府の介入など、国外労働市場へ参入する際の最低限のガイドラインとしての役割を果たすに留まっていた。

しかし2007年に改正された新国外労働法では在外ネパール人の安全と福利、人権の保全、手続きの制度化、さらに在外ネパール人労働者を対象とする基金や保険の設置など、労働者の保護や労働環境の保全が重要視されており、これがネパール国外で就労しやすい環境を整備した。また、ネパール人労働者の国際化は国外労働法の整備のほか、政府主導でそれぞれの国と交渉するかたちでも進められている。日本とは2009年に二国間労働協定が締結された。安全性が高く、安定した就労状況がある日本は、現在も不安定な政情が続くネパールにとって魅力的な移住先になったと考えられる。

日本側にも事情がある。2011年の東日本大震災で、これまで多数を占めていた中国人、韓国人留学生が激減した。日本語学校が生き残りをかけ、集客を行なった結果急増したのがネパールやベトナムの人びとだった²⁾。

入国管理局の在留資格を見ると、彼らの在留資格は2017年末で「留学」が第一位。次点の「家族滞在」のほか、「技能」と続く。アルバイトをしながら語学学校に通う多数の留学生のほか、インド料理店やネパール料理店で料理人として働く人びとも多い。彼らは技能者とみなされ、単純労働者よりもビザが取得しやすいという背景がある。レストランで働き貯蓄して独立すれば、将来的には在留資格の「家族滞在」で家族を呼び寄せることもできる。これらの要素が重なり合って、ネパール人増加の理由を作り上げている。

それでは実際に日本に在留するネパールの人びとは、どのように宗教実践を展開しているのだろうか。次節では数多くのネパール人が生活する大久保地域



調査地域

を事例として取り上げ、その展開を考察していきたい。またネパールにはネパール仏教、チベット仏教、イスラーム教などの信仰をもった人びとが多数存在するが、大久保地域においてはヒンドゥー教の動きが見てとりやすかった。そのため、本稿ではヒンドゥー教を中心に、ネパール人の宗教実践を概観していく。

2. 在日ネパール人の自宅、仕事場における宗教実践

まずネパールの人びとの自宅や職場における宗教実践のあり方を概観してみたい。一人のインフォーマントから得られた事例を紹介する。

22歳のPは出稼ぎ留学生である。ヒンドゥー教徒であり、新大久保から歌舞伎町方面に向かって徒歩数分のアパートで、同じくネパール人留学生とルームシェアをしている。留学先に日本を選んだ理由は「アジア圏で、技術が進んでいて、なかでも安全な国と聞いたから」ということである。平日の日中は新大久保の語学学校に通い、学校が終わる夕方から深夜までコンビニエンスストアでアルバイトをして過ごす。土日は昼から夜まで、ネパール料理店のウエイター

を務めている。

Pの下宿先のアパートには、ネパールから持ち込んだシヴァ神のポストカードが貼られている。Pの朝はそのポストカードに向かって、一日の安全を願うマントラを唱えることから始まる。ネパールに住んでいた頃は朝のお祈りを日の出前に行っていたが、日本の朝はネパールに比べて早い。朝起きるのが辛く、日の出前のお祈りは6時頃にずれ込んでいる。時には寝坊をしてお祈りができないまま家を出ることもあるが、「神さまは細かいことを気にしない」「日本での生活を見てくれているはず」とのこと。Pは日本の環境によって、本国での習慣通りに宗教儀礼が行えないことを「日本版のお祈り」と表す。何かいいことがあった時には花を供えたり、お香をあげたりして感謝の気持ちを表す。本国に居た頃よりもより「神様にお礼をしようと思うことが増えたかもしれない」とのことだ。お祈りに欠かせないお香は近隣のネパール人オーナーが経営する雑貨店のみならず、日系企業である大手ディスカウントストアでも購入できる。「この辺りはほとんど何でも揃う」とPは言う。

大久保地域では以前から中国・韓国籍といった外国人向けの物品が、中国人、韓国人オーナーの企業のみならず日系企業によっても数多く売買されていた。ここ数年ではネパールやインド、インドネシアといった、より広範な外国人向けの物品も取引されている。今や彼らは大久保地域に展開する日系企業にとっても重要な顧客になっている。そしてヒンドゥー教徒やイスラーム教徒である彼らのニーズにマーケットは敏感に対応し、様々な宗教関連商品を含めた輸入品を取り扱い始めている。一方でそれらの物品は、大久保地域外に居住する日本人からも一種の異国趣味とともに受け入れられており、大久保地域の特色を構成する重要な要素の一つとなっている。

大久保地域に店を構えるネパール料理店にもヒンドゥーの神様の姿が垣間見える。壁にかけられた小さな神棚は、ネパール人オーナーがホームセンターで野鳥の巣箱を購入し、一部解体して自作したものだ。内側には小さなガネーシャ像と金属製の小さな壺が2つ供えられており、水とミルクで満たされている。壺の中身は毎日オーナーの手で取り換えられており、時にはシヴァ神が好むおかゆも供えられる。ヒンドゥー教において台所は神聖な場所とされており、オーナーは、できれば本国のオーナーの家庭のように、キッチンに神棚を置きたかつ

たと語る。しかし食品衛生法の施設基準に抵触しそうだということで叶わなかったそうだ。「ホールになっちゃったのは少し残念だけど、食事をするところだからここでも大丈夫。神様はしっかり食べ物の匂いが嗅げます。それにお客様のことも見守ってくれる」と、オーナーなりの解釈を加えて、今は満足しているとのこと。日中のお祈りはランチ営業を行うレストランの性質上難しいが、朝晩のお祈りは欠かさない。

ヒンドゥー教は汎神論的な世界観を持っており、寺院以外に台所や自転車など、至るところに神の存在を感じながら生きることになる。よって彼らの信仰はネパールから日本という住環境の変化の中でも保たれ、彼らの日常生活の中では様々な実践が維持されている。その一方でネパールと日本の環境には、地理的な要因、また法制上の要因などから成る様々な違いがあり、人びとは家庭や仕事場において、必ずしも自国と同様の宗教実践を維持できない。このような環境に対し、ネパールの人びとがストレスを感じる機会も多い。しかし人びとは解釈を変え、儀礼の変更に新しい意味合いや理屈を付与し、自分なりに再解釈を行いつつ信仰を維持している。

ヒンドゥー教はキリスト教やイスラム教などの宗教に比し、概して実践に関する細かな規定・規則を持たない。このことが人びとによる宗教実践のありようの自由度を高め、ネパール移民の人びとによるヒンドゥー教実践の再解釈をより容易にしていると考えることが出来る。またグローバル化に伴い、宗教儀礼に必要な様々な商品が日本に流入し始めている点も興味深い。これまでであれば来日の際に本国で大量に購入するか、消耗品であれば本国にいる家族、知人などから送ってもらわなければならなかったものを、日本国内でも購入できる。グローバル化が、日本国内におけるネパールの人びとが宗教実践を維持し続ける助けとなっていると考えることができる。

3. シヴァ寺院における宗教実践

次にネパールの人びとが信仰するヒンドゥー教の宗教施設であるシヴァ寺院を取り上げ、宗教実践のあり方を見ていく。

2018年5月、大久保駅からほど近い雑居ビルの一階にシヴァ寺院、SHIVA MANDIR TOKYO が建立された。畳4畳分ほどのスペースには、右手の祭壇に

シヴァリング、左手の祭壇にはシヴァとパールヴァティの像が祀られ、壁にはシヴァ、サラスヴァティー、ラクシュミー、クベーラ、ガネーシャなどの神々が描かれたポスターが貼られている。礼拝に必要な道具はインドから持ち込まれており、足りないものは近辺のネパール人が経営する雑貨屋で賄う。この寺院を運営するのはバングラデシュ人のK率いる一般社団法人 Sanatan Hindu Foundation であり、同法人はヒンドウの教えを日本に紹介すること、美しいシヴァ寺院を建立することを目標としている。Kは赤坂、横浜、新宿でレストランを経営しており、商売が軌道に乗ったため、ネパール人を含めヒンドウ信仰を持つ外国人が多い大久保地域に寺院の建立を決めた。同じビルには焼肉店や風俗店などが入っており、ビルオーナーの日本人からは「何に使ってなくても構わない」と言われているようだ。

J 総武線の線路にほど近い立地のため列車の通過音が響くのがネックだが、法螺貝を吹いたり太鼓や鐘を鳴らしたりシヴァマントラを歌う様に唱えたりと賑やかなプージャー（礼拝）を行うヒンドウ寺院が騒音で周囲と揉めずに済むのは、この立地とビルのありようも影響しているかもしれない。将来的にはより敷地が広く、駐車場なども完備できる場所へ移転したいと考えており、現在の寺院はあくまで仮住まいとのこと。ヨガ教室の併設や介護分野のビジネスへの進出も考えており、Kは「せっかく日本に来たのだから、日本にいいものを伝えたい」「日本はストレスを抱えている人がとても多いように見える。シヴァのパワーで心にストレスを抱える人を助けたい」と語る。参拝者からも「日本人は細かい」「すぐイライラして怒る」といった同意の声が上がっており、日本人との接触の中で彼らが受けるマイナスイメージが看とれる。それらを改善する方法のひとつとしてヒンドウ教は捉え直されている。

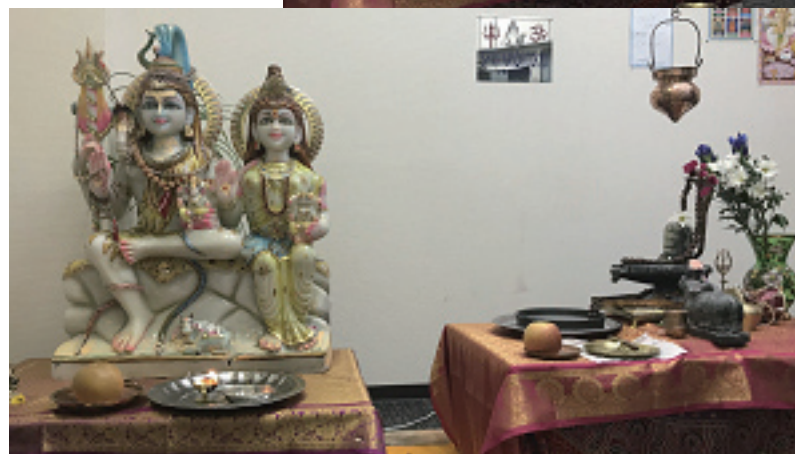
防犯上の理由から常時開放することはできないため、現在鍵を所持しているのは5人。シヴァ神に捧げられる月曜日の午後6時から8時頃までの礼拝を中心に、土日の夕方から夜、平日の朝、正午ごろなどに寺院が解放される。入れ替わり立ち替わり様々な国籍の男女が訪れる。10代から40代と年代も幅広く、彼らは礼拝をしては歓談し、寺院を後にする。参拝者によって礼拝の長短は違い、唱えられるシヴァマントラも違う。1人で淡々と祈る参拝者もいれば、僧侶と共に祈る参拝者もいる。僧侶は母国で資格を取得したインド人とネパール人の

2人。礼拝の仕方に不慣れな子供や新参の参拝者には、僧侶が英語やヒンドゥー語を使いながら身振り手振りで手助けをする。参拝することができない人びとのために、僧侶が単独で祈りをあげることもある（次頁写真参照）。

参拝者はネパール人を中心に、インド人、バングラデシュ人。来訪理由は「本国でも参拝は習慣だったから」「お祈りをあげるとほっとする」「ここに来ると誰かに会える。相談事もできる」「嫌なことがあるとここに来る」「僧侶がいる数少ない場だから」など様々。在留資格の関係からヒンドゥー僧侶は数が少なく、この寺院は貴重な存在とのことだ。またサンスクリットやインド舞踊を学ぶ日本人も訪れる。池袋や阿佐ヶ谷など、都内近郊からの参拝者が多いとのこと。Facebookのページを見たり、偶然近くを通りがかってふらりと立ち寄ったり、あるいは参拝者とビジネス上の繋がりを持った人びとだったりとそのきっかけは個人的であり、様々だ。

寺院を訪れるネパールの人びとは、本国に近い礼拝ができる点や、同じバックグラウンドを持つ人びとと交流可能な拠点としてシヴァ寺院の存在を喜んでいる。寺院側から積極的に日本人を招くわけではないが、日本人が訪れても嫌な顔をせずに歓待する雰囲気があると感じた。連絡先を交換し、定期的に寺院に顔を出すようになった日本人も居る。

ネパール寺院においては、ネパールの人びとが宗教的権威を中心に、自国での宗教実践をできるだけ忠実に保持し、継承しようとする様が窺える。また同寺院はネパールを含めた諸外国のヒンドゥー教徒による交流の場としても利用されており、宗教は人々の紐帯として機能し、異国での生活を送る上での人々の心の支えとなっている。そして寺院に集う人びとの中には、積極的とはいえないまでも、ホスト国である日本の人びとと交流を持ち、ヒンドゥー教を宗教資源として活用しようと試みる人も居る。ここには経済的にはネパール、バングラデシュよりも発展を遂げている日本が、一方でそれらの国々にはない大きな精神的欠乏を抱えているとし、グローバル化した社会の中においてヒンドゥー教の新たなニーズを創出しようとする姿が見てとれる。筆者自身も「意味は分からなくて構わないから」と、僧侶とともにあぐらをかいてシヴァマントラを唱えるという試みを勧められた。ヒンドゥー教そのものではないが、そこから派生する「宗教的なもの」をヒンドゥー教徒以外に提供していくという試みが、



(写真上) シヴァ寺院で礼拝を行う女性

(写真中) 供物を捧げられるシヴァリング

(写真下) 供物を捧げられるシヴァとパールバティの像

同寺院では行われている。

また現代社会においては偶発的な出会いのみならず、Facebook などの SNS を含んだインターネットを介して人びとが同寺院の存在を認知することも可能になる。寺院を運営する人びとがインターネットを介した情報発信を行っている点も現代的である。かつては寺院の存在を知ることのできなかった遠方の人びとが、宗教以外にもサンスクリットやヨガといった文化への興味から、インターネットによる検索を介して寺院にたどり着くことが可能となる。宗教実践の場としてのみでなく、個人的な興味関心を通じた異文化交流の拠点としての役割を、現代のネパール寺院は果たしているのではないだろうか。

4. 日本の宗教施設を利用した宗教実践

最後に日本の伝統的な宗教施設を利用したネパールの人びとの信仰実践のあり方を概観する。

新大久保駅から大久保通りを西へ 100m 向かった場所に、皆中稲荷神社が鎮座している。同社は江戸時代、「幕府お抱えの百人鉄砲隊の与力がなかなか鉄砲の腕が上がらないことに悩んでいたところ、夢枕に稲荷大明神が現れ霊符を授けた。翌朝神社に参拝して大矢場に出たところ百発百中となり、これを見た多くの旗本が競って霊符を受けたところ皆が的中するようになった」という来歴を持つ神社だ。皆（みな）中（あたる）の名の通り、現在も競馬、宝くじ、コンサートのチケットなど様々な当選を目指して参拝客が集まり、中には日本人に混ざって神社を訪れるネパール人の姿も見える。

ここでも一人のインフォーマントの事例を紹介する。平日の昼下がり、皆中稲荷神社を訪れた S はインド料理店の料理人である。新大久保から山手線で一駅隣の、高田馬場駅近隣に住んでいる。3 年以内に家族を呼び寄せ、独立するのが夢とのこと。調理に必要なスパイスを揃えに新大久保を訪れる際、皆中稲荷神社に立ち寄っている。祈り方は他の参拝客の見様見真似である。お手水や二礼二拍手一礼などの作法は怪しいが、両手を合わせ、静かに、真剣な面持ちで祈る。

S は「日本の神さまとヒンドウーの神さまは似ていると聞いた。ここに来てお祈りすると、なんだかほっとする。ここから祈っても、自分の神様に繋がる

と思える」と話した。神道もヒンドゥー教も多神教である点がヒンドゥー教に似ていると思えたこと、また教会やモスクなどと違い、空間的に解放されている点が神社に足を向けやすかった理由だそうだ。「日本人とここで話したことは無いけれど、誰かに嫌な顔をされたこともない。このあたりの人たちは、外国人に慣れていますね。神道のことはよく知らないけど、ここ（神社）は好き」とSは語った。神社だけでなく寺院に足を運ぶこともあるそうで、最近のお気に入りには浅草寺とのこと。こちらに関しては、「仏教とヒンドゥー教はほとんど同じでしょう、やっぱり私たちと同じ神様に繋がります」とも話す。

日本の宗教施設を訪れるネパール人が、神道や仏教といった宗教の作法にはできるだけ従いつつも教義の内容を自己流に解釈してヒンドゥー教に引き寄せ、日本の宗教資源を利用している姿が窺える。Sいわく「見て真似る」の文化はネパールでも根強く、その事がSの神社参拝のハードルをどちらかといえば下げている。日本人側からは境内において外国人への積極的なアプローチは行われておらず、継続的な交流などは生まれていないようだが、ネパール人の宗教的なニーズを日本の神道、仏教、そしてそれらの宗教施設が満たしている点が興味深い。ネパール本国には多数のヒンドゥー寺院が存在し、大まかにではあるが「正しい礼拝の仕方」を規定する僧侶や年長者が存在する。しかし日本という環境下では、礼拝を含めた信仰の表現の仕方は個々人の裁量に任される。日本人が外国籍の人々に対し積極的に関与せず、宗教の内容を解説しないという部分もそのありようを促進している。これらの要因によって、日本においてはヒンドゥー教の柔軟性がより強化されていると考えることができる。

おすび

本稿では大久保地域におけるネパール人へのインタビューを通じて、ネパールの人びとの宗教実践のあり方を考察した。家庭や職場では、ネパールとは違う日本の環境に合わせて自分たちの宗教実践の方法を変化させつつも、自己流の解釈を加えることによって柔軟に信仰を維持する姿がみられた。ネパール寺院では自国の宗教実践のあり方を保持、継承しつつ、寺院に訪れる日本人にはヒンドゥー教から派生した「宗教的なもの」の価値を伝え、その宗教性を資源として利用して貰おうとする姿勢がみられた。日本の宗教施設では各々の宗教

施設の作法に従いつつも、ネパールの信仰に沿わせたかたちで神道や仏教の宗教教義を再解釈し、自分自身の宗教的ニーズを満たす姿がみられた。

ネパールの人々はヒンドゥー教マジョリティの世界から日本というヒンドゥー教マイノリティの世界へと出ていくことになった。異国の環境下ではあるものの、グローバル化によって彼らの信仰を維持するための儀礼に関する様々な道具は手にすることが可能になり、それによって彼らは10年前よりも容易に自己の信仰を保つことが可能になった。一方で儀礼の方法や信仰解釈においてはそれを規定できる人々が少なく、信仰者各々の裁量に任される部分が多い。日本においてヒンドゥー教はよりその柔軟性を増し、語学やヨガといった文化や神道や仏教といった他宗教へと滲み出していく。またネパール人と日本人の間に、積極的に互いの宗教を発信し交流しようとする姿勢は見られないものの、互いに「来るもの拒まず」の宗教施設のあり方は窺える。宗教そのものというよりも、宗教を中心とした文化やビジネスなど、個人的な興味に端を発する交流は、今後もう少しずつ増加していくのではないかと考えられる。

注

- 1) 大久保は、JR 山手線で新宿駅と高田馬場駅の間に位置している。町名では大久保 1・2 丁目と百人町 1・2 丁目にあたり、南側は職安通りを挟んで日本最大の歓楽街である歌舞伎町と接している。東側は明治通り、西側は小滝橋通りで囲われ、北側には早稲田大学理工学部や東京山手メディカルセンターなど教育・公益施設が並んでいる。大久保の中心部を東西に走る大久保通りが地域の中心軸で、商店街になっている。また大久保通りには、新宿駅から JR 山手線外回りで一駅目の「新大久保駅」と、JR 中央線各駅停車で一駅目の「大久保駅」という二つの駅がある。
- 2) (財) 日本語教育振興協会、2011、「「東日本大震災」に伴う留学生の動向等調査について（最終報告）」(<http://www.nisshinkyo.org/news/pdf/j789.pdf> 最終閲覧 2018 年 9 月 19 日)。